「　リゼットの　みどりの　くつした　」

すばらしく　はれた　あるひ　リゼットは　さんぽに　いきます。

すこし　あるいたところで　リゼットは　くつしたを　みつけます。
かわいい　みどりの　くつしたです。

「ラッキーね」と　リゼットは　こころのなかで　つぶやきます。

「こんなにすてきな　くつしたを　みつける日なんて　めったにないもの！」

リゼットは　くつしたを　はいて　うきうきと　あるきつづけます。

リゼットは　すぐに　トムねこと　ティムねこに　でくわします。
きょうだいは　リゼットを　からかうのが　だいすき。
「みてよ　このくつした！　わたしが　みつけたの！」と
リゼットは　じまんげに　いいます。
「かったぽの　くつしたじゃあないか！　リゼット、きみは　まぬけだね。
もうかったぽは　どこなんだい？　くつしたは　ふたつで　ひとつってことを
しらないのかい？」

「あら、そうね」と　リゼットはいいます。
「くつしたは　ふたつで　ひとつ。もうかったぽを　さがさなくっちゃ。」

リゼットは　いちばん　たかい木に　のぼります。

飯髙　真理

てっぺんからは　なんでも　みわたせるのです。
でも　ざんねん。　どれだけ　おおきく　めを　ひらいても
くつしたの　かげすら　みえません。
「わかったわ！」と　リゼットは　いいます。
「もうかたっぽは　うみに　おちたんだ。」
リゼットは　木から　おりて、うみべに　いそぎます。

リゼットは　つめたいみずに　あたまを　つっこみます。
ちょうど　さかなさんが　そばを　とおりすぎました。
ひょっとしたら　リゼットを　たすけることが　できるかも。
「こんにちは、さかなさん。　もうかたっぽの　くつしたを　みていない？」
「いいや」　さかなさんは　いいます。
「でも　みてくれよ！　おいらは　おっきい　コーヒーポットと
ちっちゃい　くまでを　みつけたんだぜ。
とくべつだと　おもわないかい、みずに　おちる　すべての　ものは！」
「そうね」　リゼットは　ためいきをついて　いいます。
「でも　わたしは　もうかたっぽの　くつしたを　さがしているの。」

がっかりして　リゼットは　うちへ　かえります。

「どうしてそんなに　しょんぼりしてるの、おちびちゃん？」と
ママが　たずねます。
「かたっぽの　くつしたを　みつけたの。」　リゼットは　いいます。
「でも　かたっぽだけじゃ　だめなの。　くつしたは　ふたつ　なくっちゃ。」

「そのとおりね」と　ママは　いいます。
「くつしたは　ふたつで　ひとつ。くつみたいにね。

おせんたくするから、くつしたを　ちょうだいな。
そとで　みつけた　くつしたなんて　はいちゃだめよ。きたないんだから。」

リゼットは　すわって　くつしたが　かわくのを　まっています。

「あれは　きみの　ぼうしなの？」
リゼットは　ふりむきます。ともだちの　バートです。
「ぼうしじゃないわ」と　バートに　おしえます。　「くつしたよ」
「へえ！」　バートは　いいます。
「ともかく、ぼくは　ずっと　あんなぼうしが　あったらなあって　おもってたんだ。　かぶってみても　いいかい？」
「もしよければ。」

リゼットは　おもわず　ふきだしました。
「わたしの　くつした　あなたに　にあうわ！」
「ごらんのとおり」と　バートは　いいます。
「こりゃ　さいこうの　ぼうしになる。」
「ちがいないわ。　もし　ふたつあったら、ひとつは　あなたに　あげるのに。」
リゼットは　いいます。

トムねこと　ティムねこが　こそこそと　いえのまわりを　ねこあしで　うろついています。
「やーい、まぬけ！」と　ティムねこが　おおきなこえで　いいます。
「リゼット、ぼくらが　みつけたものを　ごらんよ……
きみの　もうかたっぽの　くつしたさ！」

「どこにあったの？」と　リゼットは　たずねます。
でも　きょうだいは　こたえません。さっと　にげだして　こういいます。
「とりにこいよ！」
リゼットと　バートも　ぱっと　かけだして　ひっしに　おいかけます。

「やれやれ！　あいつらは　ちびだが　かなり　すばしっこい。」と
トムねこは　はあはあ　いいます。
「それでも、あいつらは　ぜったいに　くつしたを　てにいれないね。」と
ティムねこは　いいます。　「ぼちゃん！」

リゼットと　バートは　いきを　きらして　おいつきます。
「さあ」　リゼットは　いいます。　「はやく　くつしたを　ちょうだい。」
「なんのくつしただい？　もう　くつしたなんて　もってないさ。
ほらね？　とんでいっちゃた。」

バートは　リゼットのそでを　ひっぱります。
「わすれなよ。あいつらは　いじわるだ。しかも　うそつき。
くつしたが　そらを　とぶわけが　あるもんか。」

「ずるいわ」と　リゼットは　いいます。
「もう　ふたつめのぼうしは　けっして　てにはいらない。
でも　もしよければ　わたしのぼうしを　もうすこし　かぶってていいのよ。
うちに　かえったときに　かえしてくれたらいいわ。」
「しんせつに　ありがとう」と　バートは　とても　ちいさなこえで　いいます。

うちでは　サプライズが　まっていました。
リゼットのママは　あたらしいくつしたを　ぬっていたのです。
それも　みどりのくつした。もうひとつの　くつしたと　そっくりです。
リゼットは　あんまり　うれしくて　とびあがり、ママに　だきつきます。

「くつしたは　あたまに　かぶるつもりなの？」と　ママは　たずねます。
「バートみたいに？」

「もちろん」　リゼットの目(め)は　かがやいています。

「もう　わたしたち　ふたりとも　ぼうしを　もっているのね！」
バートは　とっても　たのしくて　おどりだしてしまいます。

ねるじかんです。バートは　うちに　かえりました。
リゼットは　ぼうしを　かぶって　ねるつもり。
リゼットは　ともだちのことを　かんがえます。
きっと　ともだちも　ぼうしをかぶって　ねているでしょう。
リゼットには　ちゃんと　それが　わかるのです。

けれど　いちばん　しあわせな　よるを　すごすのは　さかなさん。
ちっちゃい　くまでと　おっきい　コーヒーポット、
かいてきな　みどりの　ねぶくろまで　みつけたんですから。

飯髙　真理